

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 21 日現在

機関番号：32698

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520409

研究課題名(和文)近代韓国における児童文化運動と韓国児童文学成立期の研究

研究課題名(英文)A Study of children's culture movement and Korean children's literature established period in modern Korea

研究代表者

大竹 聖美 (otake, kiyomi)

東京純心女子大学・現代文化学部・教授

研究者番号：60386795

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：方定煥によって始められた韓国初の児童文化運動は、朝鮮王朝末期の農民運動や開化派近代化運動、大日本帝国統治下の民族独立運動と無関係に考察することはできない。方定煥は天道教教主孫秉熙の娘婿であり、天道教少年会の活動が彼の少年運動の始まりだった。これは東学や天道教という近代朝鮮に大きな影響力を持っていた宗教団体の教理や世界観の考察抜きに彼の児童観や業績を評価することはできないことを意味している。

研究成果の概要(英文)：Korea's first children's culture and literary movement started by Bang, Jeong-Hwan, is greatly related to the the peasant movement and modernization movement of the Korean Dynasty and the ethnic independence movement under the Empire of Japan rule. Bang, Jeong-Hwan is a son-in-law of the leader of a religious group that had a great influence on modern Korea. And his children's culture and literary movement started from the meeting of the religious group. This means that it is not possible to evaluate his performance without considering Donghak doctrine and worldview.

研究分野：韓国児童文学研究

キーワード：韓国 朝鮮 児童文学 児童文化 近代 植民地

1. 研究開始当初の背景

近代以降の韓国児童文化文学を理解する上で最重要人物と言える方定煥に関して、日本ではいまだに本格的な研究がなされていない。また、韓国児童文化文学研究もまだ端緒に就いたばかりである。

2. 研究の目的

近代韓国児童文学の歴史と性格、その全体像を理解するために、韓国児童文学成立期における児童文化運動を明らかにする。

具体的には、成立期の韓国児童文学の主たる発表舞台であった1945年以前(解放前)の児童雑誌の総合的研究を通して、児童雑誌刊行の背景にあった児童文化運動を解明することと、韓国児童文学・児童文化運動の開拓者として知られながらも、未だに日本語での総合的研究および評伝等の公開がなされていない方定煥(パン・ジョンファン)の研究と評伝の編纂を通して韓国児童文学研究の基礎を築く。

3. 研究の方法

韓国児童文学学会会長である黄正鉉(ソウル教育大学校国語教育学科教授)の研究協力を受けながら、慶熙大学・韓国児童文学研究センター、大韓民国国立中央図書館、ソウル大学図書館、延世大学図書館等で1945年以前の児童雑誌ならびに方定煥関連書籍の資料収集・研究を行う。

さらに、方定煥研究に関しては、日本における韓国児童文学研究の確固たる一里塚を築く目的で、天道教などの関連施設の訪問、踏査等独自の調査研究で裏付けながら、韓国語でまとめられている評伝訳出を基礎作業として行い、注解・解説に研究成果を反映させた上でまとめる。

4. 研究成果

(1) はじめに

方定煥(パン・ジョンファン、1899年11月9日～1931年7月23日)は「韓国児童文学の父」あるいは「韓国の子どもたちの父」として敬愛される韓国近代児童文学の開拓者で、先駆的人権運動家である。ソウル市内のオリニ(子ども)大公園には大きな銅像が立てられており、子ども向けの偉人伝記全集でも定番で、ある種伝説化された英雄である。

1931年に年齢31歳で人々に惜しまれながら夭折したが、短期間で成し遂げた業績は大きい。韓国初の本格的児童文芸誌『オリニ』の創刊をはじめ、『新青年』、『新女性』、『学生』などの韓国近代を代表する重要な雑誌を編集したほか、口演童話会、少年問題講演会、児童芸術講習会、少年指導者大会などを主催し、啓蒙運動、児童文化運動、児童文学運動の指導者として文学史、教育史に特筆される。

従来朝鮮では、子どもは「児孩(アヘ)」

や「童蒙(ドンモン)」と呼ばれ、人格が認められていなかった。しかし方定煥はそれを儒教的旧弊とみなし、子どもの人格を尊重した呼称を創造しその普及に努めた。老人に対する「ヌルグニ」、若者を指す「チョルムニ」と同格で、幼い人という意味の純粋韓国語である「オリニ」を造語したのである。方定煥は彼が創刊した韓国初の児童文芸誌にこの『オリニ』の名称を使い、「オリニナル(=子どもの日)」を創設しながら、大人たちに「オリニを見下げないで、見上げるようにしてください」「オリニに敬語を使いやすくしてください」などと呼びかけた。こうした一連の近代的児童人権運動であり啓蒙運動である方定煥の「オリニ運動」は、世界的にも先駆的な例であるとして韓国で高く評価されている。

(2) 方定煥の誕生

方定煥は1899年漢城(今のソウル)に誕生した。大韓帝国の時代である。

日清戦争で清が大日本帝国に敗れ、1895年4月17日に日清講和条約(下関条約)が締結された。これによって朝鮮王朝は長きにわたる清の冊封体制から離脱した。

方定煥が生まれた家から程近いところにはこの清との冊封関係を象徴する迎恩門があった。現在、西大門独立公園となっている場所である。迎恩門は16世紀に建てられ、300年に渡って中国皇帝の勅使を迎えてきた。しかし1896年、迎恩門は破壊され、代わりにパリのエトワール凱旋門を模倣した独立門が建てられた。同じく隣接して建てられていた中国からの使臣のための施設である慕華館も独立館に改められた。つまり、中華を慕いその恩を迎えていた時代、朝鮮王朝の王が中国皇帝の臣下であった時代は方定煥が生まれるその少し前に終焉を迎えていた。方定煥は新時代を迎える地殻変動の時代に生を受けたのである。

(3) 方定煥の生家と時代背景

方定煥の生家は、王宮に食材を納品する豪商だった。朝鮮王朝の正宮だった景福宮前は、現在、韓国が誇る固有文字のハングルを創製した朝鮮王朝第4代国王世宗大王の巨大な像と噴水で美しく造成された記念広場になっている。世宗大王とハングル文字を韓国の歴史と文化の求心力とする象徴的文化空間である。この広場の西側が方定煥の生家があった夜珠岬市場があったところで、現在の行政区画では唐珠洞(タンジュドン)と呼ばれている。韓国筆頭の文化ホールである世宗文化会館が目印である。世宗文化会館の並びの王宮側には政府総合庁舎があり、広場の対岸にはアメリカ大使館、景福宮の後方には大統領府の青瓦台がある。このような、現在も過去も政治の中樞であった一等地に店を構える豪商の家門に方定煥は生まれたのだった。

朝鮮時代からの慣習で名家の跡継ぎは早婚だったが方定煥の父親も例外ではなかった。父は二十歳、祖父が四十二歳のときに誕生している。男子の誕生を格別に望んだこの時代、方定煥の誕生は、家族はもちろんのこと隣近所に入出入りの者まで多くの人々からの祝福があったに違いない。

しかし、この方定煥が生まれた19世紀末韓国の時代背景というのは、新たな世界観が必要とされた大きな地殻変動の時代であった。これまでの中華秩序の中で安定していた東アジアの世界は崩壊し、世界列強と対峙する近代国家を樹立しなければならぬ世界史的局面に立たされていたのである。中華秩序の崩壊とは、これまで<倭>の国として中華文明から外れた野蛮な島国としてみなされていた日本が、日清戦争で勝利を収めたことに始まるが、それ以前に旧態依然とした王宮の内部の問題が噴出していった時代でもあった。

日清戦争に大日本帝国は勝利し、中華秩序は崩壊した。日清講和条約によって朝鮮はこれまでの清との冊封関係から離脱させられたが、自力で独立自立の道を選択したわけではなかったため朝鮮王朝は混乱した。これまでの中華秩序の中で育ててきた精神構造上、非文明国の野蛮な倭人である日本人が世界史の舞台に登場してきたことに対する生理的不快感は相当なもので、まったくもって受け入れがたい事態だったに違いない。悪評高い朝鮮の精神病理、事大主義の対象をかつての大国清からロシアに変えただけといった状況を生み出していった。

方定煥の幼少期は、家庭的には恵まれた環境の中で過ごすことができた。一方で、この時代の様相を別の角度から俯瞰すると、混乱を極めた朝鮮王宮の外では、意志あるエリートたちが立ち上がっていった時代でもあったのである。朝鮮の地を離れ外国に学び、広い世界と近代の精神を知った留学生たちの活躍があった。『独立新聞』の発刊や、独立門の建立など自主独立を掲げた政治的行動が王宮の外部で生まれていった。

独立協会は<独立・自由・平等>という新しい世界観を掲げたが、外国からの圧力ではなく、朝鮮内部の旧勢力による弾圧によって分裂していった。それに加え、世界史の新しい局面でこれまでの東アジア世界の中華秩序を覆し頭角を現した新日本の積極的な干渉があった。亡国の危機に直面した朝鮮憂国の志士たちは、最初は義兵蜂起などの抗争で抵抗していたが、いち早く近代化を取り入れた大日本帝国の国力に到底及ばない朝鮮の前近代的な実情に気づくや、所謂愛国啓蒙運動を始めていく。なかでも教育の重要性が自覚され、数々の私立学校が設立されていった。

(4) 教育救国主義私立学校運動と方定煥が学んだ学校

韓国の歴史観の中で、近代史における「教育救国主義私立学校運動」は、重要な意味を持っている。旧体制の崩壊と新しい世界史の流れの中で亡国の危機に立たされた朝鮮民族は、自主独立の意志と抗日意識を新しい教育の中で高揚すべく、教育救国主義私立学校運動として具体的に取り組んだ。方定煥はこうした民族運動の一環として設立された名門私立学校である普成小学校に入学した。

(5) 方定煥生家の没落

1905年9月、ポーツマス条約が締結され、日露戦争は日本の勝利に終わった。続く11月には第二次日韓協約を結び大韓帝国を実質的に保護国とした。こうした時代の荒波に方定煥の生家も飲み込まれ、幸せだった幼い頃の生活は一変する。

方定煥の生家は、朝鮮王朝とその命運を共にした。方定煥が生まれて10年余りたった1910年には、ついに韓国併合の憂き目を見ることになってしまった。朝鮮王宮の斜陽とともに方定煥生家の家運も傾き、生活は困窮を極めた。

方定煥が書いた初めての童謡は「きょうだい星」だが、その詩のモチーフは、このころの方定煥自身の困窮した生活と悲しい家族の思い出であるといわれている。

(6) 善隣商業学校入学 1919年(13歳)

方定煥は、1905年に新設されたばかりの私立普成小学校に入学している。韓国では「教育救国主義私立学校運動」として近代教育史に記される民族自立を掲げる愛国啓蒙運動があったが、方定煥が入学した普成小学校はまさにその代表的な名門私立学校である。しかし、日露戦争に勝利した日本の勢力の膨張とともに朝鮮王室は没落し、王室御用達商家であった方定煥の家も没落し、普成小学校は2~3年で通えなくなってしまった。

その後、方定煥は、1913年に善隣商業学校に入学した。しかし卒業まで一年を残して中退してしまった。

(7) 朝鮮総督府土地調査局「写字生」時代 1915年(15歳)

商業学校での学業が適性に合わなかったからなのか、善隣商業学校を中退した方定煥は1915年15歳で、初めて働き口を得た。それは、朝鮮総督府土地調査局で帳簿を書き写す「写字生」の仕事だった。

現在、いわゆる民族運動のリーダーとして尊敬されている方定煥が、その実情を知らずに関わった末端の仕事だったとはいえず、現在では土地収奪事業との悪名高い朝鮮総督府による土地調査局に関係していたというのは確かに皮肉なことである。

しかし、弱冠15歳の少年である。しか

も親の引いたレールを自ら外れ、学校を中退し、社会に放り出された彼だ。生きていくために藁をもつかむような必死の想いがそこにはあったのではないだろうか。未成年の少年が大人の庇護を離れ、一人社会の中で生計を立てていくということは、多くの場合、悪しき時代性のみ込まれてしまうということを示しているのではないだろうか。

(8) 方定煥の結婚 1917年(17歳)

15歳で初めて職に就いた方定煥だったが、その2年後にはもう結婚している。朝鮮社会は伝統的に早婚であった。そして、この結婚こそ、方定煥の運命を大きく変えるものであったといえる。方定煥は、当時百万から二百万もの教徒が信奉したといわれる天道教の教祖である孫秉熙(ソン・ビョンヒ、1861~1922年、忠清北道清原郡生まれ)の三女孫溶嬋(ソン・ヨンファ)と1917年4月8日に結婚したのである。この日は孫秉熙の誕生日であった。

ところで、なぜ、方定煥はそのような縁に恵まれたのだろうか。それは、子息の結婚は親が決めるという朝鮮社会の伝統にもれず、方定煥の父親が関係している。方定煥の父、方慶洙は、天道教(東学)を信奉していた。そして、一信徒であっただけでなく、孫秉熙に最も近い人物である権秉憲(クォン・ビョンドク、1868年~1944年、忠清北道請願生まれ)の弟分として長らくその近くにいたようである。義兄弟の契りを結んでいたとも言われている。その権秉憲が義兄弟の弟分として可愛がった方慶洙の息子の方定煥を、孫秉熙の娘婿に紹介したのである。権秉憲は天道教の重要人物であり、1919年3月1日の独立宣言でも天道教代表として孫秉熙とともに署名を残しており、孫秉熙の臨終も看取っている。こうして方定煥にも、父親方慶洙が信奉する天道教との関係が結ばれていったのだろう。しかも、父方慶洙が教団の中でも特に親しんだ兄貴分が教団の実力者である権秉憲である。権秉憲は教祖の孫秉熙の近くにもいた。そうしたつながりで、三番目の娘溶嬋の婿候補として方定煥が浮上した。しかし、それはあくまでもきっかけであつたに過ぎない。結婚は、孫秉熙自身が方定煥と面会し、その目を見て決めたものだといふ。このようにして、方定煥は満17歳で結婚した。

(9) 妻の父・孫秉熙

方定煥の結婚相手の父親である孫秉熙は、天道教の教祖として教団を率い宗教的な思想を伝道しただけでなく、民族の自立と近代的国家建設のために私立学校教育の振興に力を注いでいたのだった。その流れで、

方定煥も義父の教団が運営する普成専門学校(後の高麗大)に入学することになったのである。現在、韓国の教育史研究では、こうした一連の所謂<教育救国運動>は大変重要視されている。自発的な自立と近代化への意志が民衆の中に強固に存在し、格闘していたという事実は歴史観の要となっている。

東学ならびに東学農民戦争から続く天道教と孫秉熙、そして孫秉熙の娘婿となつて彼が支援し運営した私立学校で学んだ方定煥と後に彼が興した<オリニ運動=子どもの人権と文化の運動>はそうした歴史観の中で一連の動きとして評価されているのである。

また、孫秉熙は出版事業にも力を注いだ。信仰がその基盤にあるのだが、社会事業として学校教育と出版活動に力を入れた事実は、まさに近代への志向であった。学校教育と出版事業の二点は、孫秉熙が日本亡命時に見た日本の近代から彼が着目したものだと言える。方定煥は、義父の学校で学び、出版を学び、そして韓国初の児童文芸誌『オリニ』を創刊し児童文学を開拓していくのである。

(10) 天道教人としての方定煥

こうして方定煥は、父親が天道教の信徒であったこととその人間関係から、時代を象徴する教団教祖の娘との結婚に至る一大転機を迎えた。代々その教団に所属することを<継代教人>と呼ぶが、方定煥は父の代からの継代教人に他ならない。しかし、個人としての方定煥の信仰はいかほどのものだったのだろうか。

方定煥は、19才の時に家で漢学を勉強するために老教師1人を迎え漢書を読んでいた。孫溶嬋と結婚して嘉会洞の妻の父の家で新婚生活をしている時だ。李相琴は、この時期に今さらなぜ漢書の勉強をしたのだろうか、という疑問を持ち、恐らく、漢書というのは天道教の経典である『東経大全』でないかと推測している。

方定煥の思想を理解するためには天道教の教義を理解しなくてはならない。もとは東学であった天道教の基本概念を理解するのは容易なことではないが、韓国では尹錫山(ユン・ソクサン)の『注解東学経典(東経大全・龍潭遺詞)』(東学社、2009年)やキム・ヨンオクの『東経大全』(、2004年)が出ており、日本語では呉知泳『東学史』が梶村秀樹の訳と解説で読める(平凡社、1970年)。

(11) おわりに

方定煥は、1919年の3・1独立運動主導者の一人である天道教教主孫秉熙(ソン・ビョンヒ)の娘婿である。天道教はもともと東学といい、1894年の甲午農民戦争(東学党の乱)では孫秉熙も戦っている。

る。その後孫秉熙は独立協会の人物たちと交流し、農民運動、開化派近代化運動のリーダーとして活動した。しかし、独立協会や東学は旧勢力から弾圧されたので、孫秉熙は1901年に日本へ亡命する。そこで明治維新以後近代化した東京を目にし、朝鮮の内政改革や近代化、人材育成の必要性を説くようになる。

1905年には東学は天道教と改称され、方定煥も、天道教の熱心な信者であった実父の関係で入信することになる。そして天道教少年会を発足させ、そのリーダーとして少年運動を推進していく。

このような関係から、方定煥も3・1独立運動にかかわり、1920年には憲兵から逃れるように東京へ留学していった。そして留学先の東京で、当時隆盛していた日本の『赤い鳥』などの児童文芸誌や童話、童謡といった児童文化に触れ、韓国初の単行本童話集『愛の贈り物(サランエソムル)』を刊行し、韓国初の本格的児童文芸誌『オリニ』を創刊していくのである。

これらの一連の流れや方定煥を中心としたその家族や親族、周辺の人物を眺めただけでも、彼によって始められた韓国初の児童文学運動やオリニ運動は、朝鮮王朝末期の農民運動や開化派近代化運動、大日本帝国統治下の民族独立運動と無関係に考察することはできないことが理解できる。さらに、方定煥が天道教教主孫秉熙の娘婿であり、天道教少年会の活動が彼の少年運動の始まりだったことは、東学や天道教という宗教団体の教理や世界観、人間観の考察抜きに彼の児童観や業績を評価することはできないことを意味している。

参考文献

- ・李相琴『小波・方定煥の生涯 愛の贈り物』seoul:ハンリム出版社、2005年
- ・李相琴「方定煥と「オリニ」誌 「オリニ」誌刊行の背景」大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集1995~1996』1997年
- ・李相琴「日本と韓国にける児童文化の橋~韓国オリニ文化をとおして考える~」大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集1995~1996』1997年
- ・李在徹『韓国現代児童文学史』seoul:一志社、1978年
- ・李在徹『韓国児童文学作家論』seoul:一志社、1983年
- ・李在徹「児童雑誌『オリニ』研究」『韓国児童文学研究』seoul:啓蒙社、1983年
- ・李在徹「韓国児童文学の歴史と現状」児童文学者協会『日本児童文学』1990年6月号
- ・李在徹「1920年代の韓半島の児童書 児童雑誌を中心にして」『子どもの本・1920年代展図録』1991年

- ・李在徹「韓日児童文学の比較研究(1)」大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集1989~1990』1993年
- ・吳知泳著、梶村秀樹訳注『東学史-朝鮮民衆運動の記録』平凡社、1970年
- ・キム・ヨンオク『東経大全』トンナム、2004年
- ・尹錫山『注解東学経典』東学社

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

大竹聖美「方定煥と天道教 孫秉熙の三女との結婚まで~評伝『小波・方定煥の生涯 愛の贈り物』を読む~」東京純心女子大学『紀要』第19号、2015年3月15日、pp.1~21、査読有

鄭善恵、池好順、大竹聖美「近代韓国児童文学の生成過程におけるキリスト教の果たした役割」『カトリック文化カトリコス』NO.8、2015年2月、東京純心女子大学キリスト教文化研究センター、pp.37~71、査読有

大竹聖美「『方定煥研究 誕生から10歳まで・幼少期の生家と時代背景~評伝『小波・方定煥の生涯 愛の贈り物』を読む~』」東京純心女子大学『紀要』第18号2014年3月15日、pp.53~69、査読有

大竹聖美「韓国語児童文学研究文献解題-2008年~2012年-」『児童文学研究』第46号、2014年2月15日、pp.12~24、査読有

大竹聖美「

(2001~2

011)」(日本における東アジアの子どもの本の翻訳に関して(2001~2011)) (韓国)韓国児童文学研究センター『児童文学評論』2012年秋号・第144号、pp.41~48、査読無

[学会発表](計 3 件)

大竹聖美「近代韓国の童謡・童詩と現代の<詩の絵本>」第12回アジア児童文学大会、2014年8月9日、(大韓民国昌原市)昌原コンベンションセンター

大竹聖美「近代韓国児童文学 <困

難な現実を克服する不屈の精神>と<
分かち合い>」日本児童文学学会第5
2回研究大会、2013年11月9日、
(広島県広島市)広島経済大学
大竹聖美「日本における東アジアの子
どもの本の翻訳(2001~201
1)」第11回アジア児童文学大会、2
012年8月23日、(東京都)国連大
学ウ・タント国際会議場

〔図書〕(計 1 件)

井辻朱美編著『ファンタジー・ノベル
の魅力』七つ森書館、2013年12
月15日、大竹聖美「こいぬのうんち」
pp. 134~135、大竹聖美「ドラ
ゴンラージャ」p. 166、大竹聖美
「世界で一番大切な思い」pp. 202
~203

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大竹 聖美(OTAKE KIYOMI)
東京純心女子大学・現代文化学部・こど
も文化学科・教授
研究者番号：6038795

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：